



市・史跡 こがいづか 小貝塚

魚津市諏訪町（大泉寺）

小貝塚は、大泉寺境内にある芭蕉の碑である。

魚津では、江戸時代中頃から俳諧が盛んになり、多くの人々が活躍していた。知二斎倚彦もその一人で、本名は岸本屋藤右衛門といい、享保年間（1716～1735年）に、たびたび越中を訪れていた蕉門の十哲の一人である美濃国（岐阜県）の各務支考の弟子となった。この支考から、松尾芭蕉が常に持ち遊んでいたという小貝を譲り受け、明和2（1765）年の春、これを埋めて塚を作りその上に碑を建てた。碑は、高さ1.5mの自然石で、加賀の俳人・堀麦水の筆で「蕉翁小貝塚」と彫り込まれている。

塚の横には、蕉翁の100回忌、150回忌、200回忌のそれぞれを記念して、魚津の俳人たちが献じた、3基の石灯籠が建てられている。

市内には、江戸時代の作句による短冊や額も多く、大泉寺にも町人たちの連作をまとめた「俳諧連歌十百韻」が残されており、往時の文芸の隆盛を知ることができる。